



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



ルーマニア語における間接目的語のクリティック・ダブリング現象の統語的分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 室蘭認知科学研究会 公開日: 2013-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): clitic doubling, indirect objects, Romanian 作成者: 藤田, 健 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2741

ルーマニア語における間接目的語の
クリティック・ダブリング現象の統語的分析

藤田 健

Syntactic Analysis of the Clitic Doubling
of Indirect Objects in Romanian

Takeshi FUJITA

要旨 :

Romanian has a peculiar syntactic phenomenon called “clitic doubling”, which has been analyzed by certain linguists in the framework of generative grammar. What is quite interesting in the above constructions in Romanian is that there is a sharp distributional contrast between the indirect and direct object clitics.

We argue, based on the analyses presented in Fujita(2003) and Fujita(2005), that this contrast can be explained by supposing the following syntactic conditions: i) indirect objects in Romanian bear the syntactic status of PP headed by the dative case marker, ii) clitic pronouns occurring in the clitic doubling constructions merge in the peripheral position in PP containing an element co-indexed with the corresponding clitic, whether they are direct objects or indirect ones, iii) indirect object clitics in Romanian bear the status of PP.

These assumptions, along with our suggestions on the syntactic structures of the present constructions and the licensing conditions of these latter, enable us to explain quite complicated behaviors of clitic pronouns in the clitic doubling context in a principle-based manner.

キーワード : clitic doubling, indirect objects, Romanian

1. 序論

ルーマニア語は、いわゆるクリティック・ダブリング現象が頻繁に観察される言語であることが知られている。クリティック・ダブリング現象は、生成文法において名詞句の格の扱いに関して極めて興味深い題材を提供するもので、従来いくつかの研究がなされてきたが必ずしも解決された現象とは言えない。

本稿は、藤田(2003)及び藤田(2005)における直接目的語のクリティック・ダブリング構文の分析を土台とし、間接目的語の当該構文を生成文法の枠組みで分析することを目的とする。藤田(2003)では、直接目的語が前置詞によって標示される場合のクリティック・ダブリング構文の統語構造と、名詞句の格照合について議論を展開した。藤田(2005)では、直接目的語が前置された話題化構文におけるクリティック・ダブリングの義務性が、当該構文が空演算子の関与する統語構造をもつと仮定することで説明されることを議論した。いずれの研究も直接目的語が関与する例のみを考察したものであるが、同様の構文は間接目的語が生起する場合にも観察される。

以下では、まず間接目的語のクリティック・ダブリングの分布を、直接目的語のそれと対比させる形でいくつかの統語的環境に分けて観察する。次に、それぞれの統語的環境毎に間接目的語のクリティック・ダブリングの分布に対する分析を展開し、直接目的語のクリティック・ダブリングとの相違点及び共通性を明示的に示す。

2. クリティック・ダブリングの分布

クリティック・ダブリングとは、名詞句と同一指示で同じ文法機能をもつ代名詞クリティックが共起する統語的現象である。ルーマニア語では、クリティック・ダブリングが複雑な分布を呈する。以下では重複される間接目的語名詞句が普通名詞である平叙文、疑問詞を用いる疑問文、量化詞を用いる平叙文、関係節、話題化構文の順に、直接目的語の例と対比させながら分布を見ていく。

2. 1. 平叙文

まず典型的な平叙文から観察する。間接目的語を含む場合、クリティック・ダブリングは随意的である。

(1) a. Am trimis bani băiatului tău.

(I) have sent money to-boy your

b. I-am trimis bani băiatului tău.

to-him-(I)-have sent money to-boy your (Dobrovie-Sorin1987)

これは、直接目的語の場合と全く同じ分布である。

(2) a. Am văzut pe Ion.

(I) have seen

b. L-Am văzut pe Ion.

him-(I)-have seen (Dobrovie-Sorin1994)

ただし、クリティック・ダブリングは直接目的語が前置詞“pe”によって標示される場合に限られ、直接目的語が前置詞を伴わない場合にはクリティック・ダブリングが不可能である。

- (3) * O vād cartea în bibliotecă.
it (I) see the-book in the-library

この分布には、名詞句の格がどのように認可されるかという問題が関係している¹。

2. 2. 疑問詞を用いる疑問文

疑問詞を用いる疑問文におけるクリティック・ダブリングについては、疑問詞の種類によってその分布が異なる。量化詞として機能する間接目的語の疑問詞²が生起する場合には、クリティック・ダブリングが随意的である。

- (4) a. Cui ai trimis bani?
to whom have (you) sent money
b. Cui i-ai trimis bani?
to whom to-him-have (you) sent money (Dobrovie-Sorin1994)

同種の疑問詞が直接目的語である場合には、分布が異なる。クリティック・ダブリングが不可能となるのである。

- (5) a. Pe cine ai văzut?
whom have (you) seen
b. *Pe cine l-ai văzut?
whom him-have (you) seen (Dobrovie-Sorin1994)

次に、量化詞として機能しない疑問詞を含む文について見てみる。このような疑問詞の場合には、量化詞としての疑問詞の場合と異なり、クリティック・ダブリングが義務的となる³。

- (6) a. *Căruia ai trimis bani?
to which one have (you) sent money
b. Căruia i-ai trimis bani?
to which one to-him-have (you) sent money (Dobrovie-Sorin1994)

同種の疑問詞が直接目的語である場合も、間接目的語の場合と同様、クリティック・ダブ

¹ (2)と(3)の文法性の差に対する説明については、藤田(2005)を参照されたい。

² 量化詞として機能する疑問詞と量化詞として機能しない疑問詞の区別については、3節で議論する。

³ この疑問詞は疑問形容詞として機能することもできるが、この場合もクリティック・ダブリングが義務的である。

- a. *Căruia băiat ai trimis bani?
to which boy have (you) sent money
b. Căruia băiat i-ai trimis bani?
to which boy to-him-have (you) sent money (Dobrovie-Sorin1994)

リングが義務的である⁴。

- (7) a. *Pe care ai văzut?
which one have (you) seen
b. Pe care l-ai văzut?
which one him-have (you) seen (Dobrovie-Sorin1994)

従って、量化詞として機能する疑問詞とそうではない疑問詞に対しては何らかの統語的特性の差異を認める必要がある。

2. 3. 量化詞を用いる平叙文

量化詞が用いられている平叙文においては、クリティック・ダブリングに関して興味深い分布が見られる。間接目的語の量化詞を含む平叙文では、通常の名詞句の場合と変わらず、クリティック・ダブリングが随意的である。

- (8) a. N-am scris nimănu.
not-(I)-have written to nobody
b. Nu i-am scris nimănu.
not to-him-(I)-have written to nobody (Dobrovie-Sorin1994)

これに対して、量化詞が直接目的語である場合にはクリティック・ダブリングが不可能である。

- (9) a. N-am văzut pe nimeni.
not-(I)-have seen nobody
b. *Nu l-am văzut pe nimeni.
not him-(I)-have seen nobody (Dobrovie-Sorin1994)

上記の分布は、量化詞として機能する疑問詞の場合と全く同じである。この事実は、クリティック・ダブリングに関しては、両者に対して同じ分析が適用されることを示唆している。

2. 4. 関係節

ルーマニア語における関係代名詞は、量化詞として機能しない疑問詞と同じ形式の要素が用いられる。関係代名詞の場合には、間接目的語と直接目的語の間で分布の差異が見られず、クリティック・ダブリングが義務的である。(10)が間接目的語、(11)が直接目

⁴ 疑問形容詞として機能する場合もクリティック・ダブリングが義務的である。

- a. *Pe care băiat ai văzut?
which boy have (you) seen
b. Pe care băiat l-ai văzut?
which boy him-have (you) seen (Dobrovie-Sorin1994)

的語の例である。

(10) a. *bâiatul căruia am trimis bani
the boy to whom (I) have sent money

b. bâiatul căruia i-am trimis bani
the boy to whom to-him-(I)-have sent money

(11) a. *bâiatul pe care am văzut
the boy whom (I) have seen

b. bâiatul pe care l-am văzut
the boy whom him-(I)-have seen

(Dobrovie-Sorin1994)

この分布は、形式が同一である量化詞として機能しない疑問詞の場合と同じである。この事実は、両者に対して同一の統語構造を仮定する必要性を示唆している。

2. 5. 話題化構文

ルーマニア語では、名詞句が前置される構文が観察される。Dobrovie-Sorin(1994)は、この構文が話題化構文であると主張しており、本稿もこの主張に従って話題化構文と位置付ける。話題化構文においては、クリティック・ダブリングの分布は関係節の場合と同じである。すなわち、間接目的語・直接目的語いずれが話題化された場合でもクリティック・ダブリングが義務的である。(12)が間接目的語の話題化の例、(13)が直接目的語の話題化の例である。

(12) a. *Bâiatului voi trimite bani mâine.
to the boy (I) will send money tomorrow

b. Bâiatului îi voi trimite bani mâine.
to the boy to-him (I) will send money tomorrow

(13) a. *Pe Ion am întâlnit anul trecut.
(I) have met last year

b. Pe Ion l-am întâlnit anul trecut.
him-(I)-have met last year

(Dobrovie-Sorin1994)

ただし、量化詞が話題化された場合には分布が異なる。(14)のように間接目的語の量化詞が話題化された場合にはクリティック・ダブリングが随意的であるのに対し、(15)のように直接目的語の量化詞が話題化された場合には不可能となる。

(14) a. Nimănu nu ești obligat să scrii.
to nobody not (you) are obliged to write

b. Nimănu nu ești obligat să-i scrii.
to nobody not (you) are obliged to-to-him write

(15) a. Pe nimeni n-am supărat.
nobody not-(I)-have annoyed

- b. *Pe nimeni nu l-am supărat.
nobody not him-(I)-have annoyed (Dobrovie-Sorin 1994)

この分布は量化詞が話題化されていない通常の語順の場合と同じ分布である。この事実は、話題化構文を分析する場合には通常の名詞句が前置された場合と量化詞が前置された場合とで異なった分析を行う必要性を示唆している。

3. 先行研究

ルーマニア語のクリティック・ダブリング現象について、生成文法の枠組で詳細に分析した研究として Dobrovie-Sorin (1994)が挙げられる。同研究は当該現象に関する最も網羅的かつ妥当性の高い研究であると言える。本節では、Dobrovie-Sorin の分析を概観し、その主張の妥当な点と問題点を指摘していく。

3. 1. クリティック・ダブリングと疑問詞

最初に指摘しておくべきは、Dobrovie-Sorin の分析は、クリティック・ダブリング構文に疑問詞あるいは量化詞が生起する例においてその統語標示がどのように認可されるかという点に焦点を絞って議論しており、同構文がどのように派生されるかという点に関しては一切議論を展開していないという点である。このような分析方針は、当該構文の統語構造を明示し、この構文がどのように派生されるかを明らかにするという本稿の基本的な分析方針とは明らかに立場を異にするということに留意願いたい。

以上の点を踏まえた上で、まずクリティック・ダブリング構文において疑問詞が生起する場合の分析を見ていく。前節で観察したように、用いられる疑問詞の種類によってクリティック・ダブリングの分布が異なってくる。

(5) a. Pe cine ai văzut?

b. *Pe cine l-ai văzut?

(7) a. *Pe care ai văzut?

b. Pe care l-ai văzut?

Dobrovie-Sorin は、クリティックダブリングが不可能な疑問詞は量化詞として機能する要素であるのに対して、クリティックダブリングが義務的な疑問詞は量化詞として機能しない要素であるという特徴付けを行うことにより上記の例の文法性の差を説明する⁵。

(5), (7)の例の標示を次に示す。

(16) a. Pe cine_i ai văzut e_i

b. *Pe cine_i l_i-ai văzut e_i

c. *Pe care_i ai văzut e_i

d. Pe care_i l_i-ai văzut e_i

⁵ Dobrovie-Sorin は寄生的空所の例を挙げて、この特徴付けが妥当であることを示している。

疑問詞“cine”は量化詞として機能する要素であるので、(16a,b)における空範疇 *e* は変項である。空範疇が変項として認可される条件として、Chomsky(1981)によって提案されている条件を仮定する。すなわち、i) A 位置を占めること、ii) 量化詞によって束縛されること、iii) 格標示されること、の三つの条件である。従って、(16a,b)における *e* はこれらの条件、特に iii) の格に関する条件を満たすことが必要となる。(16a)では *e* は“cine”と A'連鎖を形成し、他動詞“văzut”によって格標示されるので iii) の条件を満たし文法的となる。これに対して、(16b)では他動詞“văzut”によって格標示されるのは代名詞クリティックであると Dobrovie-Sorin は主張する。従って、*e* が格標示されず iii) の認可条件を満たさず、変項として認識されない。すると量化詞である“cine”が変項を束縛することができないため、非文になる。

これとは逆に、疑問詞“care”は量化詞としては機能しない疑問詞である。従って、*e* は変項ではありえないということになる。(16d)では、他動詞“văzut”によって格標示されるのは代名詞クリティックであるため、*e* は格標示されない。従って、iii) の条件を満たさないため変項とは認識されず、クリティックの痕跡であると文脈的に決定され文法的となる。これに対して(16c)ではクリティックが存在しないため、*e* は変項として認可されないばかりか、クリティックの痕跡としても認められず、文脈上どのような空範疇かが決定できないと Dobrovie-Sorin は主張する。このため、(16c)の *e* は適切な空範疇として認可されず非文となると説明する。

以上の説明は、統語標示に基づいて議論を展開するという分析方針のもとでは首尾一貫した説得力のあるものであると言えよう。しかし、文の派生を考慮していないため、それぞれの統語標示において空範疇がどのような構造的な位置を占めるかが明示的でないという難点がある。特に、最小主義アプローチのもとでは、痕跡がコピーであるというコピー理論が提示されていることにより、それぞれの空範疇がどのような派生によって生じたかを明示的に示す必要がある。この観点からすると、(16d)の分析には決定的な矛盾がある。Dobrovie-Sorin の分析では、(16d)の空範疇 *e* はクリティックの痕跡として認識される。すると、文頭に位置する疑問詞“pe care”は対応する痕跡が存在しないため、動詞句内から移動したのではなく文頭の位置に merge されることになる。しかし、Dobrovie-Sorin は“pe care”が生起する文においても wh 移動が関与していると議論しており、(16d)の分析はこれに矛盾してしまう。その意味で、Dobrovie-Sorin の議論は再考の余地があると言えよう。

3. 2. 間接目的語と直接目的語

Dobrovie-Sorin は以下に見られる間接目的語と直接目的語のクリティック・ダブリングに関する分布の差も説明している。

(4) a. Cui ai trimis bani?

b. Cui i-ai trimis bani?

(5) a. Pe cine ai văzut?

b. *Pe cine l-ai văzut?

Dobrovie-Sorin は、(4b)と(5b)に見られる文法性の差は、直接目的語に付与される格と間接目的語に付与される格の性質の違いに起因すると主張する。すなわち、直接目的語に付与される格は動詞によって統率される構造的な位置を占めることによって付与される構造格(structural Case)であるのに対し、間接目的語に付与される格は格付与子の語彙的特性、より具体的には θ 役割の付与を前提として付与される内在格(inherent Case)である。このことを前提として、(4b)と(5b)の統語標示を考えてみる。

(17) a. Cui_i i_i-ai trimis bani e_i

b. *Pe cine_i l_i-ai văzut e_i

(17b)の非文法性に対する説明は、前節で見た通り、クリティックに格が付与されるために空範疇 e に格が付与されず、変項としての認可条件を満たさないためであった。(17a)に同じ説明が適用されないのは、(17b)の直接目的語クリティックは構造格を付与されるのに対して、(17a)の間接目的語は内在格を付与されるという違いが存在するためである。すなわち、内在格は変項の格に関する認可条件において関与しないものである。このため、(17a)ではクリティックの存在が空範疇 e の変項としてのステータスに何ら影響を与えず、e が変項として認識され文法的となると説明している。

この分析は一見、間接目的語と直接目的語の違いを簡潔に説明しているように思われるが、理論的には不十分なものである。まず、変項の認可条件に構造格のみが関与し、内在格が関与しない理由を理論的に提示していない。一般に広く受け入れられている構造格と内在格という格の性質の違いが、理論的にどのように解釈されるかは様々な議論が可能であると思われるが、いずれにしてもこのような議論を展開する上では何らかの形でこの二つの格の相違に対する理論的立場を明確にしなければならない。

更に、この分析は具体的な面においても問題があると言える。どのような統語的環境に生起するにせよ、空範疇が変項として認可されるためには格標示されねばならないはずである。Dobrovie-Sorin の議論に従うと、この格は内在格ではなく構造格ということになるであろうが、(17a)において空範疇 e に対して構造格を付与する要素が何かという疑問に対して答えることは難しいであろう。構造格とは主格と対格であると通常考えられるが、(17a)で e はそのいずれの格も付与されるような統語的位置には生起していない。主格を付与されるのは空の主語代名詞 pro であり、対格を付与されるのは直接目的語“bani”であるからである。

以上の議論から、Dobrovie-Sorin が提示する間接目的語と直接目的語のクリティック・ダブリングに関する文法性の差に対する説明には理論的に問題があり、受け入れることができないものであると言えよう。

4. 分析

2 節での観察により、間接目的語のクリティック・ダブリング現象は二つの統語的環

境に分類することができる。すなわち、直接目的語のクリティック・ダブリング現象と分布が同じ場合及び異なる場合の二つである。前者に属するのが通常の名詞目的語を含む平叙文、関係節、話題化構文及び量化詞として機能しない疑問詞を含む疑問文である。後者に属するのは、量化詞として機能する疑問詞を含む疑問文及び量化詞を目的語として含む文である。以下では、間接目的語のクリティック・ダブリングと直接目的語のクリティック・ダブリングとの共通性は何か、更に両者を区別する相違点は何かという二点の疑問に関して理論的に解答を示すことによって、両者の分布の違いを説明する。両者の分布が同じ統語的環境について 4.1~4.4 で、両者の分布が異なるものについて 4.5~4.7 でそれぞれ分析をすすめる。

4. 1. 平叙文

藤田(2003)では、直接目的語が前置詞“pe”によって標示される構文に対して以下のような提案を行った。

- (18) 前置詞“pe”を主要部とする前置詞句は動詞の項として VP 補部に merge され、直接目的語名詞句と同一指示の代名詞クリティックもしくは pro が同前置詞句内に merge される。

この提案によって、前置詞によって標示される直接目的語名詞句とこれと同一指示のクリティックのそれぞれの格照合が理論的に妥当な形で説明される。すなわち、名詞句は前置詞によって格照合されるのに対し、クリティックは他動詞によって格照合されるのである。

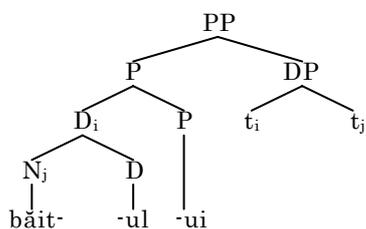
では、間接目的語が生起する文についてはどのような構造を仮定すべきであろうか。ここで留意すべきは、Dobrovie-Sorin(1994)でも述べられているように、直接目的語がもつ格は構造格であるのに対し、間接目的語の格はいわゆる内在格であると考えられる点である。この考え方を支持する現象としてスペイン語に見られる間接目的語名詞句のクリティック・ダブリングが指摘できる。

- (19) A Carlos le gusta el pan.
to him pleases the bread
“Carlos likes bread.”

構造格と内在格の違いをどのように捉えるべきかという問題に関してはいくつかの考え方がありうるが、1つの可能性として構造格は無標の格として名詞句がもつものに対して、内在格は名詞句ではなく前置詞句として具現化されると考えることができよう。ルーマニア語では内在格である与格は形態的に必ずしも前置詞によって標示されるわけではないが、他の多くのロマンス諸語においては与格は前置詞によって標示されることから、ルーマニア語のように前置詞によって標示されない与格も前置詞句を形成すると考えることができる。実際、ルーマニア語の与格名詞句は固有の格語尾を有するので、この格語尾が前置詞句の主要部を占め、名詞主要部がこの前置詞に編入した形が与格形名詞句

であると考えれば理論的にも問題がない。以下に与格名詞句の構造を示す。

(20)

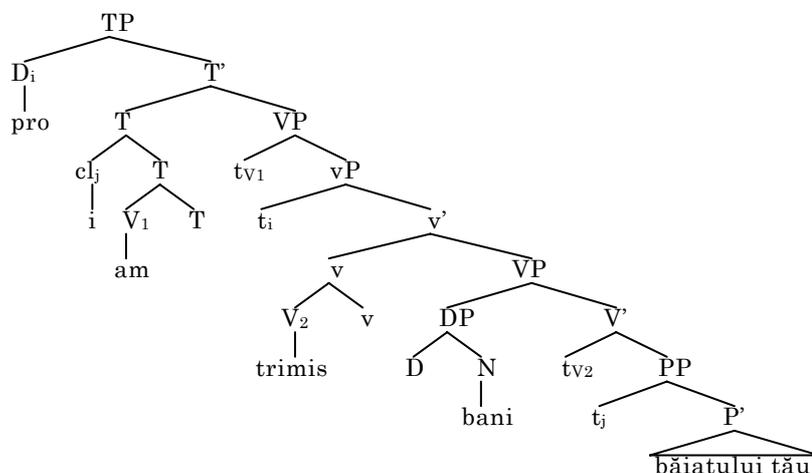


このように考えると、与格形クリティックは前置詞句である与格名詞句を指示する要素であるので、それ自身も前置詞句としての統語的ステータスをもつということが言える。

以上の考察をもとにすると、間接目的語のクリティック・ダブリング構文と直接目的語の当該構文の構造は基本的に同一で、唯一異なるのはクリティックの統語的カテゴリーのみであると考えられる。従って、本稿の分析に従うと、統語的構造が基本的に同じなので、クリティック・ダブリングに関して直接目的語と間接目的語の文法性が一致するのは当然であるという帰結が導かれる。以下に間接目的語のクリティック・ダブリング構文である(1b)の構造を示す。

(1) b. I-am trimis bani băiatului tău.

(21)



また、直接目的語クリティックが重複されない文と同じ議論が間接目的語にも適用されるため、間接目的語クリティックが重複されない文においても前置詞としての pro_p が与格接辞を主要部とする前置詞句の周辺部に merge されることになる。

4. 2. 関係節

関係節については、関係代名詞が間接目的語及び直接目的語の機能をもつ場合にクリティック・ダブリングは同一の文法性を示す。すなわちいずれの場合もクリティック・ダブリングが義務的である。

(10) a. *bâiatul căruia am trimis bani

b. bâiatul căruia i-am trimis bani

(11) a. *bâiatul pe care am văzut

b. bâiatul pe care l-am văzut

筆者は藤田(2003)において直接目的語を関係詞とする関係節におけるクリティック・ダブリングの義務性に対する分析を提示した。詳しい議論は藤田(2003)を参照されたいが、以下に分析の概略を提示する。

関係節においては、クリティック・ダブリング構文において関係代名詞を含み前置詞“pe”が主要部となっている前置詞句の構造は以下のようなになる。

(22) [PP pe [DP D [NP care [N ϕ]]]]

前置詞の補部には関係代名詞“care”を含む DP が位置し⁶、クリティックは前置詞句の周辺の位置に merge される。関係代名詞と主要部である前置詞を含み、クリティックを含まないレベルの PP が wh 素性照合のために CP 指定部に移動する。関係節の認可のためには C のもつ ϕ 素性と、先行詞となる名詞句のそれとを照合する必要がある。この際に、この ϕ 素性の照合は、同一の θ 素性をもつ全ての名詞句と同時に行われると考える。すなわち、C との ϕ 素性の照合は、関係代名詞だけでなくそれと同一指示のクリティックに関しても行われなければならない。この照合は Chomsky(2000)における Agree によって行われるが、C と関係代名詞の間のみならず、C とクリティックの間にも統語的操作を妨げる phase は存在しない⁷。クリティックは形態的特性を満たすために T の位置まで繰り上がっているからである。このため ϕ 素性の照合が問題なく行われる。

(11) b. bâiatul pe care l-am văzut

(23) [CP [PP pe [DP...care]]_i [C' C [TP pro [T' [T l_i-am] [VP ...[VP văzut t_j t_i]]]]]]

これに対して、クリティック・ダブリングが行われない文では関係代名詞を含む前置詞句の周辺の位置には pro が merge されている。この pro も関係代名詞と同じ θ 素性をもっているため C と ϕ 素性の照合が行われなければならないが、クリティックと異なり pro は基底の位置に留まったままである。すると C と pro の間には vP という phase が存在し、両者の間で Agree を行うことは phase を越えた関係付けを禁ずる phase 不可侵条件によって排除される。このため、適正な素性照合が行われず(11a)は非文となる。

(11) a. *bâiatul pe care am văzut

⁶ この DP において“care”は N 主要部ではなく NP 指定部に位置する。これは関係代名詞“care”が量化詞として機能しないという性質による。詳しくは Dobrovie-Sorin(1994)を参照されたい。

⁷ phase とは Chomsky(2001)において提案されている概念であり、統語操作が行われる限界となる領域を定めたものである。定義を以下に示す。

The domain of H is not accessible to operations outside HP ; only H and its edge are accessible to such operations.(p.13)

(24) [CP [PP pe [DP...care]]_i [C' C [TP pro [T' [T am] [VP ...[_vP văzut pro t_i]]]]]]

では、本稿が中心的な対象としている間接目的語が関係代名詞として生起する場合はどのように分析できるであろうか。既に見たように、クリティック・ダブリングについては関係代名詞が間接目的語である場合と直接目的語である場合では文法性が同じであった。この事実は、両者に対して同じ分析が可能であることを示唆している。前節で議論したように、直接目的語と間接目的語では担う格の性質が根本的に異なるため、クリティック・ダブリングが関与する構文において両者に相違点が存在することを議論した。すなわち、直接目的語と同一指示のクリティックは名詞句であるのに対して、間接目的語と同一指示のクリティックは前置詞句であるという点である。しかし、このような相違点は当該構文における統語的操作に関して何ら影響を及ぼさないものである。関係代名詞が直接目的語であれ間接目的語であれ、関係節の CP の主要部 C と関係代名詞及びこれと同一の θ 素性をもつ要素との間に ϕ 素性の照合が行われねばならない。従って、関係代名詞が間接目的語の場合にも、直接目的語の場合と同様の統語的操作 Agree が可能であれば文法性が説明されることになる。前置詞句であっても、クリティックは自身の形態的特性を満たすため対格形クリティックの場合と同様に T 主要部に繰り上がる。すると、overt syntax における C と関係代名詞及びこれと同一指示のクリティックの素性照合は、直接目的語の場合と全く同様に問題なく Agree が行われるのである。

(10) b. băiatul căruia i-am trimis bani

(25) [CP [PP căruia]_i [C' C [TP pro [T' [T i-am] [VP ...[_vP trimis bani t_j t_i]]]]]]

クリティック・ダブリングが見られない文についても、直接目的語の場合と同じように分析される。直接目的語クリティックが重複されない文では名詞句である pro が前置詞“pe”を主要部とする前置詞句の周辺位置に merge されるが、間接目的語の当該構文では前置詞句としての pro_p が与格接辞を主要部とする前置詞句の周辺的位置に merge される。関係節の C と与格形関係代名詞及びこれと同一指示の pro_p との間で ϕ 素性の照合がなされねばならないが、pro_p は vP 内にとどまっているために phase である vP が C と pro_p との Agree を妨げることになる。従って、この文は非文となると説明される。

(10) a. *băiatul căruia am trimis bani

(26) [CP [PP căruia]_i [C' C [TP pro [T' [T am] [VP ...[_vP trimis bani pro_p t_i]]]]]]

4. 3. 話題化構文

話題化構文に関しては、直接目的語が前置される例について関係節に対する分析が基本的に適用できることを藤田(2005)において論じた。以下にその概略を示す。

話題化された直接目的語名詞句は wh 移動によって動詞句内部から移動したのではなく、文の周辺的位置に merge される。話題化構文において wh 移動に特徴的な島の制約が観察されるのは、当該構文において前置された名詞句ではなく空の演算子の移動が関与していることに起因する。この空演算子は話題化された直接目的語名詞句と同一指

示のクリティックが主要部となっている DP の指定部に merge される要素である⁸。このような構造を仮定した上で、関係節において提案した ϕ 素性の照合が話題化構文にも適用されると考える。すなわち、話題化構文における C は文頭の名詞句と演算子のそれぞれの要素に対応する解釈不可能な ϕ 素性を有し、その照合が適切に行われなければ非文となるというものである。このように考えれば、関係節と話題化構文においてクリティック・ダブリングの分布が同じであるという事実は当然の帰結となる。クリティック・ダブリング構文では C と空演算子と同一指示のクリティックの間に Agree が適切に行われるのに対し、クリティック・ダブリングが生起しない文では C と空演算子と同一指示の pro の間に phase が存在するため Agree が行われない。このため、関係節の場合と文法性が同じになるのである。以下に、(13b)と(13a)の構造を示す。

(13) b. Pe Ion l-am întâlnit anul trecut.

(27) [CP [PP pe Ion] [Op_i [C' C [TP pro [T' [T l_i-am] [VP...[VP întâlnit t_i t_j anul trecut]]]]]]]]

(13) a. *Pe Ion am întâlnit anul trecut.

(28) [CP [PP pe Ion] [Op_i [C' C [TP pro [T' [T am] [VP...[VP întâlnit t_i pro anul trecut]]]]]]]]

間接目的語が話題化される場合も、直接目的語の話題化構文と全く同じ操作が適用される。すなわち、文頭に生起する間接目的語と同一指示の与格形クリティックを主要部とする前置詞句の指定部に空演算子が merge される。クリティック・ダブリング構文ではこの空演算子及び同一指示のクリティックと C が Agree し、 ϕ 素性の照合が適切に行われる。クリティック・ダブリングが生起しない文では、空演算子と同一指示の pro_p と C との間に phase が存在するため Agree が適切に行われない。このため、前者は文法的で後者が非文となるのである。以下に、(12b)と(12a)の構造を示す。

(12) b. Băiatului îi voi trimite bani mâine.

(29) [CP [PP băiatului] [Op_i [C' C [TP pro [T' [T l_i voi] [VP...[VP trimite t_i t_j bani mâine]]]]]]]]

(12) a. *Băiatului voi trimite bani mâine.

(30) [CP [PP băiatului] [Op_i [C' C [TP pro [T' [T voi] [VP...[VP trimite t_i pro_p bani mâine]]]]]]]]

4. 4. 量化詞ではない疑問詞を含む疑問文

疑問詞を含む疑問文も、演算子の移動が関与しているという点では関係節と共通している。しかし、両者のクリティック・ダブリングに関する分布は必ずしも一致しない。既に観察したように、直接目的語が疑問詞となっている疑問文では、疑問詞の種類によってクリティック・ダブリングの文法性が異なっている。従って、前節までに展開した分

⁸ このような構造は、話題化構文においては量化詞的要素が関与していないという Dobrovie-Sorin の主張に基づくものである。Dobrovie-Sorin は量化詞として機能しない wh 要素は NP の主要部ではなく指定部に merge されると分析している。

析とは異なる扱いが必要となってくる。

まず、Dobrovie-Sorin(1994)が指摘しているように、分布の異なる二種類の疑問詞を統語的特性に関して区別しなければならない。すなわち、クリティック・ダブリングが可能な疑問詞“care”は量化詞としては機能しないのに対し、クリティック・ダブリングが不可能な疑問詞“cine”は量化詞として機能するというものである。本稿では、この両者の統語的相違は指示性に関する違いを引き起こすと考える。本節では先ず、量化詞として機能しない疑問詞から考察する。

量化詞ではない疑問詞“care”及び“căruia”の場合には、“cine”, “cui”とは異なり、クリティック・ダブリングが義務的であった。

(6) a. *Căruia ai trimis bani?

b. Căruia i-ai trimis bani?

(7) a. *Pe care ai văzut?

b. Pe care l-ai văzut?

両者の違いはどのように説明されるであろうか。ここで本稿が注目したいのは、量化詞として機能しない疑問詞は先行する文脈等でその指示対象が限定されることから、指示性が高いという意味的特性を有している点である。この特性は、理論的には名詞句としての ϕ 素性の照合がこの疑問詞の認可に関与するという統語的特性として読み替えることができる。すると、量化詞として機能しない疑問詞は、すでに議論した関係代名詞と同じ扱いが可能になる。関係代名詞の場合には、先行詞という関係節の上位にある要素との関係によって ϕ 素性が決定されるのに対し、疑問詞“care”, “căruia”は、文脈において決定される要素との関係付けによってその ϕ 素性が決定される。そして、この ϕ 素性はwh素性と共にC主要部との照合によって認可される。このときに、関係節の場合と同じ条件、すなわち ϕ 素性の照合が同一の θ 素性をもつ全ての名詞句と同時に行われるという条件が適用される。従って、クリティックが生起する場合にはCとクリティックとのAgreeが問題なく行われるのに対して、クリティックが生起しない場合すなわちproもしくは pro_p が生起する場合にはCとproのAgreeが不可能になるという、関係節の場合と全く同じように説明されるのである。以下に、(6a,b), (7a,b)の構造をそれぞれ示す。

(31) a. * $[_{CP} [_{PP} \text{căruia}]_i [_{C'} \underline{C} [_{TP} \text{pro} [_{T'} [T \text{ ai}] [_{VP} \dots [_{VP} \text{trimis bani } \underline{pro}_p \text{ ti}]]]]]]]$

b. $[_{CP} [_{PP} \text{căruia}]_i [_{C'} \underline{C} [_{TP} \text{pro} [_{T'} [T \text{ i-ai}] [_{VP} \dots [_{VP} \text{trimis bani } t_j \text{ ti}]]]]]]]$

c. * $[_{CP} [_{PP} \text{pe } [_{DP} \dots \text{care}]]_i [_{C'} \underline{C} [_{TP} \text{pro} [_{T'} [T \text{ ai}] [_{VP} \dots [_{VP} \text{văzut } \underline{pro} \text{ ti}]]]]]]]$

d. $[_{CP} [_{PP} \text{pe } [_{DP} \dots \text{care}]]_i [_{C'} \underline{C} [_{TP} \text{pro} [_{T'} [T \text{ i-ai}] [_{VP} \dots [_{VP} \text{văzut } t_j \text{ ti}]]]]]]]$

このように量化詞として機能しない疑問詞“care”, “căruia”は、同じ形式を有する関係代名詞と統語的に同じ性質を共有するために、クリティック・ダブリングに関して分布が同じであると考えられるのである。

4. 5. 量化詞としての疑問詞を含む疑問文

前節で議論した量化詞ではない疑問詞とは異なり、量化詞として機能する疑問詞は先行する文脈によって何らその指示対象を制限されることがなく、変項を束縛するという機能を有する。従って、この疑問詞は性・数をもつ具体的な名詞句に対応せず、指示性が極めて低いという意味的特性をもっていると言える。これに対して、クリティックとして生起する代名詞は本来談話に存在する要素もしくは文脈上特定化される要素を指示する機能をもっており、指示性が高い要素であると言える。量化詞である疑問詞のクリティック・ダブリングに関して、直接目的語と間接目的語で分布が異なるという事実は、この指示性が重要な要素となっていると本稿では考えたい。

この指示性という点に注目して、以下の二つの例の統語構造を考えてみよう。

(4) a. Cui ai trimis bani?

b. Cui i-ai trimis bani?

(5) a. Pe cine ai văzut?

b. *Pe cine l-ai văzut?

疑問詞が直接目的語として生起する場合には、前置詞“pe”の生起が義務的である。すると、“pe”を主要部とする前置詞句内にクリティックもしくは **pro** が生起するという統語構造をもつことになる⁹。

(32) a. [PP clⁱ [Pⁱ pe NPⁱ]]

b. [PP proⁱ [Pⁱ pe NPⁱ]]

ここで、クリティックは指示性が高い要素であるので、同じ前置詞句内に生起する同一指示の疑問詞も指示性が高い要素でなければ素性に関して不一致が生じ、適切な意味解釈が不可能となってしまう。このため指示性の低い演算子“cine”とクリティックは共起できず、クリティック・ダブリングが不可能になると説明できる。

次に、疑問詞が間接目的語である場合を考えてみよう。クリティック・ダブリングに関して重要なのは、量化詞として機能する疑問詞“cui”がクリティック・ダブリングを許容する点である。直接目的語と間接目的語という統語的ステータスが異なるという点以外は同じ条件であるはずの二つの疑問詞において、クリティック・ダブリングに関してふるまいの違いが生ずるのはなぜであろうか。本稿では、両者の違いである格の性質の違いにその理由が求められると考えたい。直接目的語は構造格を担うのに対して、間接目的語は内在格を担うため、4.3 節で議論したように、前者と同一指示の対格形クリティックは名詞句であるのに対して、後者と同一指示の与格形クリティックは前置詞句である。ここで、間接目的語の疑問詞“cui”の構造を考えてみよう。4.1 節で議論したように、ル

⁹ 移動による連鎖の指標と区別するために、同一指示であることを右上付きの同一指標で表すこととする。

ルーマニア語では与格標示の語尾が前置詞句の主要部の位置を占め、名詞がこの位置に編入するという構造を仮定した。更に、間接目的語と同一指示のクリティックは前置詞句としてのステイタスを持ち、与格語尾を主要部とする前置詞句の周辺的位置に merge する。クリティック・ダブリング構文における“cui”の構造は以下ようになる。

(33) [PP [PP clⁱ] [P' [P N_i P] [NP t_i]]]ⁱ

直接目的語の場合と異なるのは、前置詞句であるクリティックが同一指示であるのは名詞句である疑問詞ではなく、前置詞句全体であるという点である。このため、前置詞句同士の素性一致に関して、名詞句としての疑問詞が担う指示性に関する素性が関与しないと考えることができる。すると、クリティックと pro_p のいずれも前置詞句内に merge されることが可能となる。従って、間接目的語“cui”の場合にはクリティック・ダブリングが随意的となるのである。

以上のように、疑問詞“cine”, “cui”と疑問詞“care”, “căruia”との間に存在する指示性の違いという意味的特性を、φ素性という理論的概念に対応させることによって、両者のクリティック・ダブリングに関する分布の違いが簡潔に説明されるということになる。

4. 6. 量化詞を含む平叙文

直接目的語や間接目的語が量化詞である平叙文におけるクリティック・ダブリングの分布は、量化詞として機能する疑問詞の場合と全く同じであった。すなわち間接目的語の場合にはクリティック・ダブリングが可能であるのに対し、直接目的語の場合には不可能である。

(8) a. N-am scris nimănu.

b. Nu i-am scris nimănu.

(9) a. N-am văzut pe nimeni.

b. *Nu l-am văzut pe nimeni.

この現象には、量化詞として機能する疑問文に対する説明がそのまま適用される。直接目的語は構造格を担うことから名詞句としてのステイタスを持ち、これとクリティックとが同一指示の場合には指示性が高くなければ素性の衝突が生じてしまう。このため、指示性の低い量化詞“nimeni”はクリティックと同一指示が不可能となり、クリティック・ダブリングが生じない。

(34) *[PP clⁱ [P' pe nimeniⁱ]]

これに対して、内在格を担う間接目的語は格標示をする接辞を主要部とする前置詞句としてのステイタスをもつ。従って、間接目的語クリティックも前置詞句としてのステイタスを持ち、同一指示の量化詞“nimănu”とは前置詞同士の素性一致が行われ、名詞句の特性である指示性は関与しない。

(35) [PP [PP clⁱ] [P' [P nimănu_i-ui] [NP t_i]]]ⁱ

このため、クリティック・ダブリングが可能となるのである。

4. 7. 量化詞の話題化

量化詞が話題化された構文では、量化詞を含む平叙文の場合と同様、間接目的語はクリティック・ダブリングが随意的であるのに対し、直接目的語はクリティック・ダブリングが不可能である。

(14) a. Nimănu*i* nu ești obligat să scrii.

b. Nimănu*i* nu ești obligat să-*i* scrii.

(15) a. Pe nimeni n-am supărat.

b. *Pe nimeni nu l-am supărat.

これは、通常の名詞句を話題化した構文では直接目的語・間接目的語いずれの場合もクリティック・ダブリングが義務的であるのと対照的である。この文法性の違いはどのようにして説明されるであろうか。

本稿では、この違いは通常の名詞句と量化詞の統語的カテゴリーに関する違いに帰せられると考える。前節で述べたように、そもそも量化詞とは通常の名詞句とは異なり特定の名詞句を指示するという指示性が低い要素である。変項を束縛し演算子として機能するという意味解釈上の特性をもっていることから、常にそれ自身が移動して痕跡を残すという統語的特性をもつ。従って、量化詞の話題化構文は、wh 構文と同様に動詞句内に merge された量化詞が移動する構文として捉えるのが適切である。ここで、新たな問題が生ずる。wh 構文の場合と異なり、量化詞の顕在的な移動は常に起こるのではないということである。常に overt syntax において移動する wh 要素と顕在的な移動が義務的ではない量化詞との違いは何であろうか。これは両者の持つ素性の違いに起因すると考えることができる。wh 要素がもつ wh 素性は解釈不能な素性であるので、LF において存在することが許されない。これに対して、量化詞のもつ QR 素性は LF において解釈可能な要素であるので、よりコストが低い LF において移動が行われるのである。

では、量化詞の話題化構文はどのように統語的に特徴付けられるであろうか。話題化される量化詞は、通常の話順で生起する量化詞とは異なり、wh 素性をもっていると考えられる。これは、通常の名詞句の話題化構文において生起する空演算子をもっている素性と同じものである。つまり、ある要素を文頭に置くことによってその要素を文の主題(topic)にするという操作は、理論的には wh 素性の存在によって引き起こされるということである。この wh 素性は解釈不可能な素性であるので、量化詞が overt syntax において CP 指定部に移動し、wh 要素や空演算子と同じように C との素性照合が行われるのである。以下に、(14a,b), (15a)の構造を示す。

(36) a. [_{CP} [_{PP} nimănu*i*]_i [_{C'} C [_{TP} pro [_{TP} ... nu ești [_{VP} obligat să scrii pro_p t_i]]]]]

b. [_{CP} [_{PP} nimănu*i*]_i [_{C'} C [_{TP} pro [_{TP} ... nu ești [_{VP} obligat să i_j-scrii t_j t_i]]]]]

c. [_{CP} [_{PP} pe nimeni]_i [_{C'} C [_{TP} pro [_{TP} ... n-am [_{VP} ... supărat pro t_i]]]]]

最後に、通常の名詞句の話題化構文と量化詞の話題化構文との違いについて言及しておきたい。4.3 節で、前者において話題化された名詞句は周辺部に **merge** されたものであって、それ自身が動詞句内から移動したものではないと分析した。これに対して、量化詞の話題化構文では、量化詞が動詞句内から CP 指定部に移動すると本節で分析した。同じ話題化構文であるにも関わらず、このように異なる統語構造が与えられるのはなぜであろうか。これは、**wh** 素性という意味的特性に対応する統語素性と通常の名詞句とが整合しないためであると考えられる。通常の名詞句は、言語的あるいは言語外的にその指示対象が完全に特定されるという意味解釈上の特性をもっている。これに対して、**wh** 素性とは本来疑問に関わる素性であるため、完全に指示対象が特定化される要素とは相容れない概念であると捉えられよう¹⁰。量化詞はそれ自体強い指示性をもっていないため、**wh** 素性が与えられても意味解釈上の整合性に影響を与えることはないのである。

5. 結論

本稿では、間接目的語のクリティック・ダブリング現象を直接目的語の当該現象と対照させながら、両者の統語的特性を生成文法による理論的観点から明らかにした。具体的には、以下のように分析した。

- i) ルーマニア語における間接目的語は、与格語尾を主要部とする前置詞句としての統語的ステータスをもつ。
- ii) クリティック・ダブリングにおいて生起する代名詞クリティックは、直接目的語・間接目的語の別を問わず、同一指示の要素を含む前置詞句の周辺的位置に **merge** される。
- iii) ルーマニア語の間接目的語クリティックは前置詞句としてのステータスをもつ。

以上の仮定を前提とした上で、間接目的語のクリティック・ダブリングを詳細に分析するために、まず当該現象が観察される統語的環境を、間接目的語と直接目的語の間で分布の差が生じるか否かという観点から二つに分類した。一つは両者の分布の差が見られないもので、通常の名詞目的語を含む平叙文、関係節、話題化構文及び量化詞として機能しない疑問詞を含む疑問文がそれに該当する。もう一方は、両者の分布に差が観察されるもので、量化詞として機能する疑問詞を含む疑問文及び量化詞を目的語として含む文が該当する。

前者の環境において間接目的語と直接目的語で分布の差が観察されないのは、それぞれ

¹⁰ 本稿の分析に従うと、英語に見られるような代名詞の重複が行なわれない話題化構文においても、同様の構造が関与していると考えられる。

John she loves.

すなわち、この文において移動するのは空演算子であり、文頭の名詞句は文の周辺位置に **merge** されるという構造をもつことになる。

れの構文における各要素の認可条件に関して両者に差が生じないためである。すなわち、基本的には同一の統語構造を有するので平叙文では文法性に差が生じないのは当然である。また、関係節、話題化構文、量化詞として機能しない疑問詞を含む疑問文では、いずれも前置される要素とCとの間に ϕ 素性の照合が行なわれねばならないが、この統語操作が行なわれる際に、間接目的語・直接目的語とも同じ条件が課されるために文法性が等しくなるのである。

これに対して、後者の統語的環境において間接目的語と直接目的語で分布の差が生じるのは、上で述べたiii)の特性が関与すると議論した。量化詞及び量化詞として機能する疑問詞は指示性が低いという意味的特性を有しており、生成文法の枠組みでは特定の ϕ 素性をもたないという統語的特性をもつと言える。これに対して、代名詞クリティックは特定の名詞句と同一指示である要素であるため、明確な ϕ 素性をもつという統語的特性をもっている。従って、両者が同一指標を有して共起すると、 ϕ 素性の不一致が生じるために不適格となる。直接目的語クリティックは名詞句としてのステータスをもつため、量化詞として機能する要素とこのような関係をもつことが不可能となるため、直接目的語のクリティック・ダブリングはこのような統語的環境において観察されない。これに対して、間接目的語クリティックは前置詞句としてのステータスをもつため、DPである量化詞として機能する要素と同一指標を有することが理論上排除される。このため、 ϕ 素性の不一致も生じず、このような統語的環境においてもクリティック・ダブリングが観察されると説明できる。

本稿の分析は、クリティック・ダブリング現象という個別の統語的現象に対する明示的な分析を提示するにとどまらず、当該現象の分析を通じてルーマニア語における直接目的語クリティックと間接目的語クリティックの統語的ステータスの違い、更には同言語における直接目的語名詞句と間接目的語名詞句そのものの統語的ステータスの違いを明らかにすることができた。つまり、後者では明示的に前置詞が生起しないものの、与格語尾を主要部とする前置詞句が構成されるという従来の研究には見られなかった新たな視点を導入することが可能となった。これは、格理論の分野で様々な議論が展開されてきた構造格と内在格という二つの抽象格の区別を、より明示的な形で捉え直すという可能性を示すことで、生成文法に対する理論的な貢献をなすものであると言えよう。

今後は、本稿での分析がルーマニア語の他の統語的現象、あるいは他のロマンス諸語において観察される類似の現象において適用可能かどうかを検証することが課題であると言える。

参考文献

Burzio, Luigi(1986), *Italian Syntax*, Reidel.

Chomsky, Noam(1995) *Minimalism Program*, The MIT Press.

_____ (2000), "Minimalist Inquiries: The Framework," In Roger Martin et al.(eds.) *Step by Step*, pp.89-155, The MIT Press.

- _____ (2001), "Derivation by Phase," In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, pp.1-52, The MIT Press, Cambridge.
- Cornilescu, Alexandra(1987), "A Note on Dative Clitics and Dative Case in Romanian", *Revue Roumaine de Linguistique tome XXXII*, pp.213-225.
- _____ (2000), "Notes of the Interpretation of the Prepositional Accusative in Romanian," *Bucharest Working Papers in Linguistics*, pp.91-106.
- Dobrovie-Sorin, Carmen(1987), *Syntaxe du Roumain - Chaînes thématiques*, thèse de doctorat, Université Paris 7.
- _____ (1994), *The Syntax of Romanian*, Mouton de Gruyter.
- _____ (1999), "Clitics across categories: The case of Romanian", In van Riemsdijk, H.(ed.) *Clitics in the Languages of Europe*, pp.515-540, Mouton de Gruyter.
- Fujita, Takeshi(1999), "Les pronoms clitiques non-réfléchis en français", *Journal of the Linguistic Society of Japan* 115, pp.7-49.
- Ionescu, Emil(2000), "The Role of PE in the Direct Object Construction in Romanian," *Bucharest Working Papers in Linguistics*, pp.81-90.
- Jaeggli, O.(1986), "Three Issues in The Theory of Clitics: Case, Doubled NPs, and Extraction, In Borer, H.(ed.) *The Syntax of Pronominal Clitics*, pp.15-42, Academic Press.
- Jones, M.A.(1996), *Foundations of French syntax*, Cambridge University Press.
- Kayne, Richard S.(1977), *Syntaxe du français*, Seuil.
- _____ (1991), "Romance Clitics, Verb Movement, and PRO", *Linguistic Inquiry* 22, pp.647-686.
- Legendre, Géraldine(2000), "Optimal Romanian clitics: a cross-linguistic perspective", In Montapanyane, V. (ed.) *Comparative Studies in Romanian Syntax*, pp.227-264, North-Holland.
- 藤田 健(2003), 「ルーマニア語における“pe”構文の統語構造」, 『北海道大学文学研究科紀要』第 110 号, pp.89-112.
- 藤田 健(2005), 「ルーマニア語における話題化構文の統語的分析」, 『北海道大学文学研究科紀要』第 115 号, pp.59-87.

執筆者紹介

所属：北海道大学大学院文学研究科西洋言語学講座

Email： fujitat@let.hokudai.ac.jp

専門分野：統語論、ロマンス語学